



TITLE:

<特集論文>コメント：呪術的实践
= 知の現代的諸相 --科学/医療/宗教
/その他の実践 = 知との並存状況か
ら

AUTHOR(S):

島藺, 洋介

CITATION:

島藺, 洋介. <特集論文>コメント：呪術的实践 = 知の現代的諸相 --科学
/医療/宗教/その他の実践 = 知との並存状況から. コンタクト・ゾーン
2015, 7(2014): 232-236

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209801>

RIGHT:

コメント:呪術的实践=知の現代的諸相 ——科学/医療/宗教/その他の实践=知との並存状況から

島蘭洋介

本特集に寄稿された論文は、京都人類学研究会主催のシンポジウム「呪術的实践=知の現代的諸相——科学/医療/宗教/その他の实践=知との並存状況から」(2014年7月12日)での報告にもとづいている。論文の執筆者である黒川、津村、飯田は、『呪術の人類学』[白川・川田編 2012]にも寄稿しており、この共著やそれに先立つ共同研究が、三氏によるシンポジウムの報告と本特集の論考の下敷きとなっている。

『呪術の人類学』では、「人々が呪術などを経験したり実践したりしている個々の具体的かつ微視的な場面」において「当事者の視点から呪術的なもののリアリティを理解すること」が中心的な課題とされていた[白川 2012: 17]。とくに同書の特筆すべき特徴は、「常識的なもの」と「超常的なもの」との間のギャップや、知識・信念の領域と実践の領域の間の齟齬への着目である[白川 2012; 川田 2012; 関 2012]。呪術の効力に対する疑念や留保的態度、あるいは当事者がそれまで抱いていた信念や確信の揺らぎといった出来事は、呪術的实践=知に外在的なものではなく、むしろ、構成的な役割を果たすものであると捉えられていた。そして、逆接表現(「○○と分かっている、でもやはり××」)や仮定法的語句(「あたかも△△のように」)の使用に典型的に現れるような亀裂の契機を孕んだ呪術的实践の主体性が繰り返し主題化されていた[cf. Favret-Saada 1980]。

シンポジウムでは、こうした議論をふまえて、以下の点で呪術的实践=知の現代的諸相の理解を深めるという着想が川田により提起された。第一に、呪術に関わる主体の経験を「知る・信じる・行う・感じる」という四つの契機とその相互関係から理解すること、言い換えれば、知識・信念と実践に加えて、感性(感覚、感情)の役割に着目することである。第二に、近代科学や生物医学などの实践=知と呪術的实践=知の相互関係を、学校や病院といった具体的な社会的空間に定位することで記述し考察することである。以下では、こうした視点がどのように民族誌的研究や歴史的研究において具体化されるのかを念頭に、掲載順序を逆にさかのぼるかたちで、黒川、飯田、津村、三氏の論考について筆者の所感を述べることにしたい。

まず、黒川の論文である。黒川は、「西欧近世における『呪術的／魔術的实践＝知』を探究していくにあたって『信じる・知る・行う・感じる』という四つの動詞に注目するという今後の研究」の展開を見据えつつ、西欧近世における魔女信仰とその衰退の背景となる文化的変容を論じている。

中世から近世における西欧の魔女信仰の核心は、悪魔と契約を結び、悪魔に生贄を捧げ、魔術を操り人畜に被害を与えたり天候に影響を与えたりするとともに、乱交や食人などの「反自然」的な行為に耽る存在としての「魔女 witch」の観念にある。こうした観念は、15世紀から、権威ある書物と証言を通じて「異端、ユダヤ教徒、女性といった西欧社会の具体的な『他者』的存在を融合したもの」として形成されたものである。16世紀半ばから17世紀半ばには、そうした「魔女」の告発と審問、処刑が数多く行われた。「正統」による「異端」の排斥のなかで成立した魔女信仰は、17世紀後半以降、機械論的哲学や視覚優位の近代科学的な自然観の隆盛のなかで衰退していく。

本誌の論考や『魔女狩り——西欧の三つの近代化』における黒川の論述のなかで筆者が注目したいことの一つは、「魔女」と「呪術＝魔術」の不可視性、それに付随する「魔女」に関する知識・信念の不確定性、変異性、振幅性である〔黒川 2014〕。「魔女」が不可視であるというのは、通常魔女の一味以外にはサバトを目撃しえず、「魔女」の罪状とされる行為は直接に観察されることはないからである。そのため、悪魔と魔女の契約や性交、サバトでの食人や乱交は実際に生じているのか、それとも「魔女」とされた人々の幻想、幻覚、妄想にすぎないのか、「呪術＝魔術」は実際に効力をもつのかなどの問題について諸説が生じた。魔女裁判の批判者と支持者との間、あるいは魔女裁判に関わった異端審問官や裁判官らの間にさえも、見解の不一致があった。

このことは、なおいっそう魔女裁判によって、「魔女の火あぶり」という「リアリステックかつマテリアルな光景」が生み出されたことの奇妙さを際立たせる。黒川によれば、『魔女』は実体ではない」ということになるが、その「魔女」の観念が生み出され、再生産されていく過程で、決定的に重要であったのは魔女裁判それ自体における審問、拷問、自白であった〔黒川 2014 : chp3〕。「魔女」の不可視性は、自白とは独立に魔女の罪を確証できるものがないことを意味し、まさにそれ故に、拷問という真理のゲームが重要性を帯びていたのである。

こうした魔女裁判の役割について考えるとき、西欧の中世における司法的手続きの変遷に関するアサッドの議論は興味深い〔アサッド 2004: 93-141〕。アサッドは、西欧中世において、告発主義的手続き（神判、託宣、試罪、決闘、宣誓など）から糾問主義的手続き（尋問と拷問を中心とする審問）へと司法手続きが移行することにとともに、真実と身体の苦痛の関係がいかに変容したかについて優れた分析を行っている。アサッドの議論は、比較文化論的に見て、「魔女」に対する尋問・拷問という手続き（「知る」）、被告に加えられる苦痛という感覚（「感じる」）、自白＝告白やそれを通じた悔悛（「行う」）が信念（「信じる」）の形成と強化に重要な役割を果たした点において、西欧中世の魔女信仰は際立った特徴をもつことを示唆する。この点は、「信じる・知る・行う・感じる」という四つの動詞に着目して魔女信仰をめぐる実践＝知の文化的特性を理解する際にも重要な手掛かり

となりうるのではないかと、筆者には思われる。

飯田論文と津村論文に移ろう。両者の論考が対象とする東北タイやタイ北部の村落では、過去数十年の間に、学校教育とともに、近代医療が人々にとって非常に身近な存在となってきた。飯田によれば、こうした中で、西欧近代的な「呪術」概念——「科学」（知識）と「宗教」（信仰）という対比における残余的なカテゴリーとしての「呪術」（迷信）——は、東北タイやタイ北部の村落にも浸透しつつある [cf. 関 2012; タンバイア 1996]。一方で、病院・保健センターでは、「伝統医療」を再評価し、その実践者と協力しようとする動きがある。また、学校では、教師が生徒に伝統的慣習を「科学的」に説明するように促すことがある。他方で、「呪術」（*saiyasat*）は、近代医療や学校教育には包摂されえないものとして、忌避・排除される。このように、学校や病院・保健センターは「科学」に適合する「伝統」「慣習」「信仰」とそうではないもの（＝「呪術」）を差異化する役割を演じている。

飯田は、こうした状況のなかで「感じる」ことを契機として医療従事者や学校の教師の知識・信念が動揺する契機に着目する。ここでいう「感じる」には、狭い意味での感覚——いわゆる「五感」——だけでなく、驚き、恐れ、不安といった情調性も含まれる。

「感じられるもの」には、「気配」や「雰囲気」もある。この点は、重要である。なぜなら、近年、人類学では、「感覚の人類学」という旗印のもとで、研究の対象として、あるいは、フィールドワークの経験の基盤として、感覚が見直されてきたが、その際、感覚が感情と切り離されて論じられる傾向があったからだ [cf. Howes 1991; Pink 2009]。

本稿で飯田が挙げているのは、生徒が卒倒するという出来事を目の当たりにしたある学校の教師の例である。この教師は卒倒を「脳」の異常として理解しようとする一方、精霊祭祀にも参加してしまう。また、ある学校の生徒は、別の教師が、不気味な足音を聞いた後、精霊のための供犠を依頼したことを知る。「科学的な」知識や思考を伝達するための空間である学校が、教師と生徒の間でオカルト的なもののリアリティを共有する場へと転化してしまっているのである。また、保健センターでは、医師がある患者のレントゲンを見て、「不可解」で「奇妙」な事物を目の当たりにする。生物医学を象徴するレントゲンという視覚技術が、医師に「呪術的なもの」に関する想念を呼び起こすのだが、保健センターでは、この謎めいた、不気味な現象を科学的に解明する手段はない。このように、教師や医師は生徒や患者と接触するなかで、「呪術的なもの」を感じ、呪術的实践＝知の「外」と「内」の狭間に自己を見出すことがある。

これらと幾分類似した事象は、津村による論文でも扱われている。津村の調査村やその近辺では、1960年代に、「注射医」という新たな民俗医が登場し、人気を博したが、保健センターが開設された1980年代以降、急速に姿を消した。こうした過程は、一見「科学的」な医療が、生物医学の象徴として注射器を「擬似科学的」に利用する治療を駆逐したとようにも見える。しかし、これは事態の一面にすぎない。津村によれば、注射医の隆盛の背景には、痛みとともに「異種のものの特力な力が身体内に入ること」への村人の期待があり、保健センターの医療従事者による注射に対しても、村人は同様の期待を抱いている。つまり、医療従事者は注射医の「上位互換」でもあり、保健センターによる注射は

「疑似科学」ならぬ「擬似呪術」としての側面をもつようになったと見ることもできる。

さらに、津村は多元的医療状況のなかで、もっぱら呪文を唱え、患部周辺に吹きかけるという素朴な施術パオ（*pao*）を行う呪医モーパオ（*mo pao*）について論じている。パオという治療が興味深いのは、生物医学が優位性をもつ（と考えられている）疾病や症状を治療対象としているからである。モーパオは、精霊に対する供儀を行う呪医のように自律的な病因論の体系をもたないし、薬草師のように「科学」によってその有効性が認められる物質を利用することもない。パオは生物医学とタンバイアの言う意味での共有された主題や空間をもつように思われる〔タンバイア 1996: 222-226〕。したがって、村人からも懐疑の視線に晒されやすく、モーパオもまたそうした懐疑の視線とは無縁ではない〔津村 2012〕。津村によれば、こうした状況でもパオが訴求力を持ち続けているのは、施術が患者にもたらす感覚的経験のためである。例えば、蛇咬傷の治療では、モーパオが患者の腕に息を吹きかけると、患部から熱がひくのを感じ、治癒の過程にあることを「実感」する。こうして呪術の効力はリアリティを獲得する。

しかし、筆者には、これだけではパオの役割を理解するには不十分であるように思われる。生物医学における蛇咬傷の診断や治療は、さまざまな不確実性に付き纏われているのに加え、津村の調査村の最寄りの保健センターには、蛇の抗毒血清が置かれていないという事情にも注目すべきであろう（群の病院では村落における蛇の種類に対応する抗毒血清が全て保管されているのかは津村の記述からは定かではない）。蛇咬傷の生物医学的診断・治療の浸透は、新たな不確実性を生み出し、そのことがパオに補完的な治療としてのニッチを作り出しているとも考えられる。

いずれにせよ、飯田と津村の論考は、共通して以下の点を示しているように思われる。すなわち、生物医学や学校教育の浸透とともに、「科学的」なものと「非＝科学的」なものが差異化される状況のなかで、両者の間に引かれた境界線が動揺してしまう契機がある。また、学校や保健センターのような近代性を体現するはずの社会空間にも、「呪術的」な実践＝知のニッチが存在する。「科学」に由来する器具や装置も、それがなければ存在しない「呪術的なもの」を作り出す場合もある。

以上、黒川、飯田、津村の三者の論文について、筆者なりの理解と所感を述べてきた。改めて三者の論文を並べると、研究の方法のみならず、扱っている事象の性格も大きく異なっていることに気づかされる。それでは、三氏の論考からなる特集全体から、「呪術的实践＝知の現代的諸相」の研究にとって、どのような生産的な知見あるいは教訓が引き出されるのだろうか。

この点で示唆に富むのは、黒川の論考における以下のような言葉である。『『呪術的实践＝知』の『現代的諸相』の解明は、その『歴史的諸相』の解明をふまえてこそ、その特質が一層明確になるだろう。そしてこの二つの諸相の間には『西欧の近代化』という大きな問題が横たわっている』。黒川によって叙述される魔女裁判を取り巻く実践＝知は、「呪術」が「非科学的」な「超自然的な力」への信仰にもとづく行為として「宗教」と「科学」との対比において位置づけられる近代的な概念空間の特異性を浮き彫りにする。他方で、飯田と津村の論考が扱う事象では、呪術的实践＝知が、近代科学や近代医学をめぐる

間いと切っても切れない関係にありながらも、上記のような近代における呪術の「命名の力学」[関 2012] には回収されない事象を拾い上げて記述している。三氏の論考は、近代的な「呪術」概念をいかに脱構築しつつ、「呪術」についての新たな語り口を模索するのか、という極めて難解ではあるが、しかし重要な問題を提起しているように思われるのである。

<参考文献>

- アサッド、タラル 2004 『宗教の系譜——キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』中村圭志訳、岩波書店。
- 飯田淳子 2012 「不可視なものとの接触——北タイ農村における患いと治療」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.181-206。
- 川田牧人 「さやかならぬ「日常」の呪術論——「言葉と行為」から、さらに「呪術と日常」へのビジョン」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp. 47-80。
- 黒川正剛 2012 「呪術と現実・^{リアリティ} ^{トゥールース} ^{イマジネーション} 真実・想像——西欧近世の魔女言説から」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp. 113-148。
- 2014 『魔女狩り——西欧の三つの近代化』講談社。
- 関一敏 2012 「呪術とは何か——実践論的転回のための覚書」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.81-112。
- 白川千尋 2012 「言葉・行為・呪術」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.9-45。
- タンバイア、スタンレー J. 1996 『呪術・科学・宗教——人類学における「普遍」と「相対」』多和田裕司訳、思文閣出版。
- 津村文彦 2012 「呪術の確信と疑心——タイ東北部の知識専門家モーをめぐって」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』人文書院、pp.233-267。
- Favret-Saada, Jeanne 1980 *Deadly Words: Witchcraft in Bocage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Howes, David 1991 *Sensorial Anthropology*, In David Howes ed. *The Varieties of Sensory Experience: A Sourcebook in the Anthropology of the Senses*. Toronto: University of Toronto Press, pp167-190.
- Pink, Sarah 2009 *Doing Sensory Ethnography*. New York: Sage Publication.